進捗状況の概要　【１ページ以内】

本補助金事業では、中国の清華大学、韓国の韓国科学技術院（KAIST）との間で、人材育成を目的としたプログラムを実施してきた。平成28年度、平成29年度の主な活動としては、**学生交流プログラム（受入・派遣）の実施、ダブルディグリー拡充の可能性調査、21世紀型スキル教育の強化**が挙げられる。専任スタッフの雇用、三大学の関連教職員が会する合同運営委員会の実施、スカイプミーティングを通じて事業が円滑に推進されるようにした。

学生交流プログラム（受入・派遣）の実施

■　**外国人留学生の受入：平成28年度に10名、平成29年度に20名の計30名（清華大学 13名、KAIST 17名）を受け入れた。**平成28年度は、1か月～5か月の「研究重視型教育」プログラムでの受入を行った。平成29年度は、サマープログラムを開催した。

「授業中心型教育」プログラムでは、主に学部生を対象とし、専門に応じて基礎から最先端までの知識を修得する集中授業を受講した。**平成29年度は、別プログラムの欧米大学からの留学生も一緒に授業を受講した。**「研究重視型教育」プログラムでは、主に大学院生（又は学部４年生以上）を対象とし、派遣・受入大学両教員の理解のもと研究を行った。プログラムの一貫として、**最先端の研究所や企業の見学等、日本の科学技術の現場を体感できる機会を盛り込んだ。また、日本語講義や茶道・書道等の文化体験を実施し、日本語の基礎と日本文化について学ぶ機会を提供した。さらに、派遣学生もしくは所属研究室の学生がチューターとなり生活支援を行うことで留学生と東工大生の交流を図った。**

秋以降は、2か月～5か月の「研究重視型教育」プログラムでの学生受入を行った。

■　**日本人学生の派遣：平成28年度に6名、平成29年度に11名の計17名（清華大学 2名、KAIST 15名）を派遣した。**清華大学では、約5か月間の留学期間中、中国語や専門分野の授業の受講、研究室に所属しての研究を行った。KAISTでは、1か月間のサマースクールの中で、授業の受講や研究室所属型体験をするとともに、フィールドトリップ等を通して韓国の文化体験やKAISTおよび他大学の留学生との交流する機会が提供された。秋以降は、1か月以上の希望の期間、研究室に所属して研究を行った。

受入・派遣に共通する取組として「修学計画書」がある。この「修学計画書」に基づき、派遣先・派遣元の両教員が学生の取り組む修学計画を理解し、共通認識を持って指導にあたることで、短期間でも学生にとって有意義な時間とすることができた。

ダブルディグリー拡充の可能性調査

平成28年度は、三大学の関係教職員が会した合同運営委員会での可能性調査に加え、KAIST-東工大間で各分野の教員により、さらに具体的な可能性について協議を行った。平成29年度は、KAISTより経営工学系の教員を招聘し、共同指導と学生交流の可能性について議論した。また、東工大の生命系の教員がKAISTを訪問し、さらなる協働体制についてディスカッションを行った。ダブルディグリーの分野拡充がされれば、学生にとって双方の大学での修学がより有効で効果的なものになり、教育効果が高まると期待される。今後はより具体的な拡充について意見交換を進めていく。

21世紀型スキル教育の強化

平成２９年度までに、学生向けには5回の「21世紀型スキル」教育の講義を行い、留学生および本学学生が科学技術の知識のみならず、コミュニケーションスキルの重要性を理解するきっかけを提供することができた。また、留学生対応業務に従事する事務職員対象のセミナーを2回実施し、異文化間コミュニケーションをよりスムーズにするための機会となった。さらに、「グローバルコンピテンスワークショップ」を清華大学にて開催、三大学の教職員が参加し、清華大学が全学をあげて取り組む21世紀型スキル教育について学んだ。

【本事業における中間評価までの交流学生数の計画と実績】

平成28年度				平成29年度			
派　遣		受　入		派　遣		受　入	
計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績
5人	6人	5人	10人	10人	11人	10人	20人

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【１ページ以内】

運営・事業全体

- **日中韓学長フォーラム開催後すぐに三大学の教職員によるキックオフミーティングを行い、事業運営や基本方針について共有することができた。**また、実際に顔を合わせることで、コンソーシアムとしての一体感が増し、さらなる協力体制を築くことに繋がった。
- **専任のスタッフが連携大学であるKAISTと清華大学を訪問し、派遣学生が滞在する宿舎や食堂等を視察したり、実際に公共交通機関を利用したりした。現地の生活を知ることにより、実感を持って派遣学生向けのオリエンテーションを行うことができた。**

学生交流プログラム（受入・派遣）の実施

- 滞日中は、専門の近い本学学生をチューターに指名し、生活支援を行った。これにより、言語や文化の違いで起こる不便さを軽減した。
- **受入学生滞在中に、派遣予定学生および派遣経験学生との交流会を開催し、自由に意見交換が出来る場を設けた。これにより、受入学生・派遣学生双方に「キャンパス・アジア生」というチーム意識が生まれ、友好を深める機会となった。特に、これから留学する本学学生にとっては、事前に受入大学の学生と情報交換が出来る貴重な機会となった。**
- 派遣学生向けの事前学習として、派遣先でのマナーや基礎的な現地の言葉に関する勉強会を行った。これにより、言語や文化の違いに対する不安を軽減した。
- 平成29年度サマープログラムにおける授業中心型教育プログラムでは、座学だけでなく授業テーマに関連した企業や研究施設へのサイトビジットも盛り込むことで、受入学生が日本の科学技術の現場を体感する機会を提供することが出来た。

ダブルディグリー拡充の可能性調査

- 平成28年度に、KAISTと本学の間で、物質理工、情報理工、環境・社会理工、の教員、ならびに事業推進者の分野毎のダブルディグリー会合を行い、若手教員を中心に、窓口となる担当教員を指名し、それぞれの分野で可能性の議論を行った。
- 生命理工分野では、平成28年度に東工大で、平成29年度にはKAISTにて、関係教員と大学院生による合同ワークショップを行い、分野内で連携可能な教員を選定し、本プログラムを通じた学生交流の基礎を確立した。
- また、社会理工分野においても、合同ワークショップを行い、教員同士の連携の可能性を調査した。
- 平成29年度までに、物質理工、情報理工、環境・社会理工の担当教員を通した連携を確認し、それらの連携研究に基づく今後の学生の受入と派遣の計画と、ディグリー取得に対して解決すべき要件の抽出を行った。

21世紀型スキル教育の強化

- **平成29年度までに、学生向けに５回、職員向けに２回の「21世紀型スキル」教育のセミナーを開催した。**いずれの回も学外からコミュニケーションスキルを専門とした講師を呼び、学生にとって短時間でも有意義な時間になるようにした。
- **30年3月には、清華大学で「グローバルコンピテンスワークショップ」を開催、三大学の教職員が参加し、清華大学が全学をあげて取り組む21世紀型スキル教育について学んだ。**

その他

- **学生の滞在中に困難なことが生じた場合や事前の準備の際に、事業を推進する教員ならびに事務職員が、３大学間で、メールだけではなく、ネットワークTV会議を開催するなど、日中韓の関係者のより親密な顔が見える意思疎通を行うことによって、問題点や解決方法の共有がより綿密に行われるようになった。**これは、修了要件や規定やシステムの最適化と共に、３カ国の差異や共通課題をより理解し、円滑に推進する原動力となっている。